原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百六十九号

原告団レポート

遺族――

広沢ムツオさん

春日原にて

福岡市西春町四丁目一八―二、といえば、俗に春日原と呼ばれている町。その澄明なたたずまいの一隅にある家で、悲しい思いこそ消せないながらも、一面、しあわせに暮らしている遺族がいる。広沢ムツオさんで、亡夫の名は修功さん。述べるまでもなく、三池大爆発のとき命を奪われたもので、広沢さんにすれば、この人ときわめて数奇な運命の紐でからくも結ばれて夫婦になっただけに、かくべつ心のなかに刻まれた悲しみの消えることはない。

今――、大正十二年十一月十九日生まれの彼女が五十七歳で、大正六年十二月十三日生まれだった修功さんが、もし生きているものとすれば六十三歳のはずだが…。

故・修功さん（向かつて左）の生前の面影。昭和32年3月3日笹林公園で。40歳のときで、隣りは山口正勝さん。人柄がにじみ出ている。

遠く蒙古へ

彼女は、熊本県下の名のある営農地帯、菊池市の北古閑に生まれる。

生家は堀田姓。役場の吏員だった父親真治さん（昭和三十五年八十二歳で没）と母親春江さん（同三十二年六十歳で夫に先だつ）との間に、八人きょうだいの六番目の子として生まれた。

旧制女学校まで学んだあと、蒙古へ。駐蒙軍司令部に軍属として勤務していた義兄岩根勇さん（姉婿）を頼っての渡蒙で、それはあの太平洋戦争開戦前夜の昭和十六年、彼女が十八歳のときだった。

蒙古は今でいう内モンゴルのことで、中国の現首都北京から八達嶺の嶮を越え、さらに遠く西の方に位置する辺境。当時、徳王が居城をもっていた張河口を首都としていた。

駐蒙軍の司令部もその張河口に置かれていたが、渡蒙した彼女は日ならずして蒙古連合自治政府に勤務する身となり、姉の家から通いながら事務に専念。そこで知り合った人こそほかでもなく、数年後夫婦として結ばれることになる亡夫の修功さんだった。

さびしいながらも、しあわせでもある遺族の広沢さん。訪ねた日、仏壇の下から、大事にしまつている亡夫の遺品をとり出して見せてくれたのが忘れられぬ。

その大罪が許せるか

どう考えてもわからぬ会社の責任回避

からくも結ばれた夫だった

彼は参謀部

彼は、島根県の大社市（出雲大社のあるところ）を本籍とする父親伝一さん（彼の中学二年のとき早逝）と母親斉（さい）さん（昭和四十八年に九十三歳で没）との間に生まれた、五人きょうだいのなかの三番目だった。

父親は青年期に、島根県から選ばれて国内留学。東京の農業専門学校に学んだほど、傑出した人物だった。農業土木技師として、福岡県をはじめ九州各地に業績をとどめ、農業土木に関する優れた著もある。

彼とて父親に劣らぬ向学心こそもっていたものの、父親に急逝されては道なく、折角学んでいた中学を中途退学。成長なかばにして早くも、世間の荒波のなかへ。

満二十歳で徴兵検査に合格。軍隊生活へ。彼女と見知ったとき、彼はすでに軍人として張河口にあり、彼女の義兄が軍属として勤務する駐蒙軍司令部の参謀部に執務していた。早や曹長の身だったという。

運命の紐が

彼は、彼女の義兄の囲碁のよき相手だった。毎晩のようにやってきては、きっと彼女の優しい眼差しを背に感じながら、碁盤に向かっていたことだろう。

述べるまでもなく独り身だった。軍人として身を立てる意を固めていた彼は、それまであえて妻帯する考えを棄ててきていた。愛する妻や子どもを戦争未亡人にしたり、戦争遺児にしたりして、悲しい思いをさせてはならない、というのが彼の信条だったのだった。

だが、いつとも知れず、そんな彼の胸の奥に芽生えていった彼女への思慕。彼がかねて固めていた信条は、春の淡雪のように溶けてゆき、やがて義兄の介添で取り交わした婚約。母国から遠く離れた異境の地でのこと、二人のよろこびはどんなだったろう。

別れわかれ

そんな二人を、日に日に深刻化する戦争が容赦なくひき裂いていった。無謀にも、日本帝国主義が日中戦争に重ねて突入していった太平洋戦争が、いよいよ緊急を告げてきた昭和二十年の春まだ浅いころのこと、駐蒙軍司令部の参謀部に勤務する彼に重要任務が…。某日、ひとりさびしく見送ってくれた彼女を張河口駅に残しながらゆく先も告げずに去っていった彼。駐蒙軍を、緊急を告げる戦況に備え、はるばる中支（上海辺りか）に移動させるための下調べだった、とはあとでわかったことだったが……。

引揚げ列車

その年の八月十五日。二人が再び蒙古の地で会うことのないまま日本は敗戦した。二人はついに離ればなれになってしまい、のぞみは絶たれたかに見えた。

今は泣くにも泣けぬ、昨日にかわる敗戦国民の身。彼女は姉一家とともに、着のみ着のまま引揚げ列車で蒙古を離れる。以後は、客車でない有蓋貨車に牛や豚同様に押し込められたまま、長く、苦しい母国への旅となった。

一度停まればいつ動き出すものやら、まったく見当がつかぬ引揚げ列車。八達嶺の嶮を越え、北京を通り過ぎ、彼女たちを母国にまで運んでくれる引揚げ船が待つと聞く天津港まで、それは何十日、何カ月かかった旅だったろう。

途中、病人が出、発狂者が出た。次つぎに飢え死にしていった幼な児たちの小さな遺体は、列車が停まるごとに、いずことも知れぬ土地の野辺に埋められたり…。

八路軍の襲撃もくり返された。引揚げ列車に、護衛のためだと乗り組んでいた国府軍との間で、そのたびに起きる激しい銃撃戦。つかまえられたか、停車している列車のすぐ側に並んで立たされた八路軍の兵士が、国府軍の手で、非情にも銃殺されるところをただ放心のまま、何の感懐もなくながめたこともある。

よろこびが

彼女が、食べるものがなく、飲む水をさえこと欠く苦しかった旅をからくも耐え抜き、恐るべき栄養失調のため体重が半分にも減ったからだで、菊池の親もとにたどりつくことができたのは、修功さんと結婚を交わした思い出の地――蒙古を離れてから半年前後もたった、翌年の初めのころだった。

「よく帰ってきてくれた。修功さんは、先に帰って待っているゾ」――暖く迎えてくれた両親が開口一番、口にしてくれた言葉はこれだった。

ほんとによかった。彼女は蒙古から引き揚げて帰てきた二十一年の十二月五日、やっと結婚にゴールイン。式は、戦後の余儀ない事情から彼女の実家で。彼はすでにそのとき三川鉱に入社、保安部に勤務しながら、彼女を妻に迎える準備を整えてきたのだった。

結婚の約束をはたしてから、ともに長かった苦しい時間と世界を生き抜いてきたあと、はからずも結ばれることのできたよろこびの日。

闘いのはて

大牟田市新港町三川鉱社宅でスタートした、新しい生活。

二十三年一月二十日長女の信子さん、二十五年九月二十九日長男の哲郎さん、二十七年九月八日次女の道子さんが、それぞれ誕生。

日に日に、三池闘争に向かっていた三池の歩みは、その後炭婦協（今の三池主婦会）結成、英雄なき百十三日の闘い――、と発展しながらいよいよ歩みにあわただしさを加えてゆき、ついに三池闘争へ。

その間修功さんは選ばれて、大牟田市議会に、三池労組代表として見ごと席を占めること二期。そのあと職場に帰ったが、こんどは坑外から転じ、坑内仕繰工として仲間とともに採炭重要工事現場で働くようになった。神ならぬ身の知るよしもなく、昭和三十八年十一月九日、それから幾ばくもなくして三川鉱で炭じん大爆発発生。無残な最期を遂げることになってしまったのである。

燃える怒り

彼の人柄を一言に評せば、人のために生きる、ということに尽きた。春日原の住居に訪ねた日、広沢さんは語った。

「あの人にとって一日の二十四時間は、ほとんど人さまのためにあるみたいな、そんな人でした」

修功さんは、数多くの日記類を妻の手に残しているが、これは彼の最後の日記となったある日のページに記され、光を放っている言葉である。

「他人の意見を常に聴くべし」

「己れの行動の全ては誠実をもってすべし」「不正の行為あるものにへつらうな」「思想だけで思いやりがなかったら、人の心を失っていく」「知恵のみで愛がなければ組織はつくれない。許し合う気持がなければ、組織は崩れる」後略。

遺族広沢ムツオさんは、亡夫ともども、残酷な苦難をからくもくぐり抜けた末数奇な運命の紐で結ばれたばかりでなく、人間としてこんなにも素晴らしかった夫を奪われたのである。彼女は訴える――「四十億をくだらぬといわれる世界人口のうち、私にとってはたった一人の夫、子どもたちにすればたった一人の父親だったものを奪い去られたのです。これほどの大罪を犯したかぎり、当然とるべきはずの責任なのに、それがなぜとられないのか、どう考えてもわかりません。ですから責任をとってもらうのに裁判しか道がないのなら、私は一生を裁判にかけるだけです」と。

ここにも怒りの火が燃える。